

父子鷹

完結篇

子母澤
寛

長江

○同吟味役(臺所)前廊下七十儀言文持持 文藝春秋新社

木村紋糸

芳浪重幸

大能重忠

山本信幸

美登 二十石高

①御軍艦奉行 同並 千石高

父左大將 三百表

大當分五表

奇利義

二頁入

勝 安房守

日 庚辰二庚五

水主

馬

守 鷹

完結

御 母 澤 寛

水主

夏永橋

水主

水主

京左京則靜

二百表 二百表

二頁入

以後守以後守長發

正月 正月

馬

馬

馬

鷹子父

定

昭和三十一年十一月一日 初版
昭和三十一年十二月十五日 三版

定價 二九〇圓

著作者 子^し母^も澤^{ざわ} 寛^{かん}

發行者 車^{くるま}谷^や 弘

印刷者 曾^{そう}根^ね 盛^{もり}事^じ

發行所 文藝春秋新社

東京都中央區銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

萬一落丁亂丁の節はお買求めの書店又は發行所にてお取換致します

印刷 扶桑印刷
製本 福神製本

目次

風かおる 七

遠雷 一五

遊山無盡 二三

爽秋 三二

初見世 四一

片唾 四九

御用達 五八

天の理法 六六

新栗 七五

慾の顔 八四

鯛 九二

氣 合	侍 の 最 後	白 い 椿	御 肴	御 紋 服	御 願 塚	木 曾 路	山 茶 花	知 行 所	羅 紗 羽 織	宅 番	付 懸 け	塵 芥
二〇五	一九七	一八八	一七九	一七〇	一六二	一五三	一四四	一三五	一二七	一二八	一〇九	一〇一

味 噌 汁	仲 之 町	新 堀 端	青 柿	足 懸 り	垢 離 場	甲 州 神 座 山	庭 作 り	死 場 所	御 見 舞	雲 雀	他 行 留	木 綿 一 反
三一八	三二〇	三〇一	二九二	二八三	二七四	二六五	二五七	二四八	二四〇	二三一	二三二	二二三

我 儘

三二七

町の師匠

三三五

馬方蕎麥屋

三四四

榮 枯

三五三

氣 絶

三六一

江戸人

三七〇

騒亂の世に

三七八

装幀 佐野 繁次郎

カバー 竺仙(ちくせん) 染めがすり
見返し 同 薩摩すじ

父子鷹

完結篇

風 か お る

今夜はさわやかないゝ風がある。晝の間に仕立屋の辨治が、何處からか、珍らしい籠枕かごまくらが到來したといふので置いて行つた。小吉は縁へ出てそれをして團扇を使いながら星空を見ている。もつと眞ん中へ出れば、風もよく来るのに、隅っこへ寄っているのは鱗太郎が縫物をしているお信と向い合ひに行燈を眞ん中にして、きつちり坐つて本を見ているから、何んとなく悪いような氣がするからだ。

「御免下さいまし」

人が訪ねて來た。聞馴れない聲だ。小吉はすぐに出て行つた。玄關は暗い。が、五人いる。小吉も立つたまゝで、無言でじつと見詰めていた。

「中組八番の火消人足傳次郎と申します」

流石の小吉もびくくりした。と同時に、奥の居間にいる鱗太郎の方へ首を曲げて見てから、小さな聲で「せがれが學問をしている。こんなところでごた／＼云われては大層迷惑。用があつたら、おれが方からすぐにも出向いて行くから、歸れ」

「へ？」

「歸らなければ斬っ拂うぞ」

「へえ。實は」

「實はも屁もない、歸れ」

と少し怒鳴りつけてから急に

「只今、すぐに参ります。仕度をする間少々お待ちをいたごう」

そういつて、奥へ引返して來て

「お信、妙見の講の事で、ちよいと出て來る。袴を」

「はい」

麻の白地に着かえて袴をはくと、例によつて池田鬼神丸をすつとさして出て行つて終つた。麟太郎は、本から眼をはなし、お信を仰ぐように見て、にこりと笑つた。小吉がこれを見たら、こ奴め、知りやがったかと、頭をかいて笑つたろう。

暗い中を、小吉が先きで、うしろへ何れも紺の香のぶん／＼するまだ一度も袖を通さない中組八番の役附の絆纏姿で、無言で入江町の角、大横川の岸まで靜かに歩いて來た。小吉は不意に立停つて

「何用で來た」

といつた。

「へえ」

「闇討なら、人數が足りなからう」

「と、と、飛んでもござんせん、勝様、闇討どころかお詫に参つたのでございます」

「何んの詫だ」

「へえ」

と傳次郎は、地べたへ坐つて終つた。四人もつゞいて坐つた。

「頭を丸めてめえるべきが本當でござえますが、それじゃあ氣障だ、見せつけたと、お氣持を損じましてはと思ひやして、髷をつけたままで出ましてございます」

傳次郎は地べたへ顔をすりつけるようにした。

「これなるは組の役附人足一同でございますが、勝様、重々これ迄の不重寶、どのようなお仕置も仰せに従いますでござんす」

「何をいっている」

と小吉は笑聲で

「仕置どころかおれはお前らなんぞ愚にもつかねえ人足風情を何んとも思つてやしねえ。思つたらお前の首なんざあ、とつくの昔、胴へくつついちゃあいねえんだ。おれがせがれの急所へ、お前の犬が咬みついて飛んだ災難だったが、犬はおれが斬つた。元々おれがせがれは可哀そうに何處までも運悪く生れついている奴だ。まあ／＼それでいゝ。世上の噂じゃあ、お前の方がおれをどうかするといふ事だが、止めたのか」

「へえ、まことに申譯ないことを致し乍らそれを逆恨みなど、勝様、文盲の人足でござえます。御勘辨を願います」

「それはともかくお前、評判が悪いな。が、えん、破落戸（びらくこ）、天下の町火消がそんな事じゃあ仕方があるまい」

「へえ」

「それに、北組十二番とも不仲だというが、纏持の松五郎は、せがれがお前の犬にやられた時によく面顔を見てくれた。おれも恩は返さなくてはならない。お前、あの組とやるなら、おれが出て行くがいゝか」

「あれもわたしの組が悪い事、改めて詫に参るつもりでござんす」

「ほう、お前のところはまた、急に神妙な事になったではねえか。おれは臆病だから薄氣味が悪いねえ」

「しかし深川にいて勝様というお方がどれ程のお侍かも知らず、横車を押していたなどは、全く、わたし共は馬鹿でございました」

「そうかねえ」

「お坊ちゃまへ、わたしの犬が咬みました事はどのようにでもしてお詫を申しますが」

「はっはっ。そ奴あ遅かったわ。せがれはもう達者で、このおやじの行狀を、ちらり／＼と睨んでいるよ。餘計な事をされては却って迷惑千萬だ」

「へえ」

「が、おれが方はいゝから、松五郎とは仲よくする事だな、あれは立派な男だよ。それにしてもお前ら山之宿の佐野槌へ、ずいぶん早く駆けつけたが、あれ程早業が出来るといふに火事といふつも／＼出遅れで大火にする、いけねえな」

「へえ。實はあの時はを組の頭取助五郎という者の祝事がありまして参って居りましたところ、喧嘩の對手は勝小吉ときゝ、よし、それならおれ達に呉れろと」

「おれが貰われたかえ」

「それが大變な間違いでござえました」

すう／＼と風が流れて來た。川の匂をはらんで心なしか冷やりとする。

「いゝ風だ」

と小吉は

「話はわかった。お前らがおれを殺さねえというなら、今夜から枕を高くねむれるから、歸るよ」

「あ、か、勝様、勝様」

「噂は悪いが、逢って話せばお前も案外いゝ奴らしい。その中、松五郎共々ゆっくり話すでしょう」

「そ、それにつきまして」

「先ず松五郎と相談を定めてから來い。あ奴はおれがところのお信にも信用があつて、話はよく通るから

ね」

小吉はもうどん／＼行つて終つた。

お信は玄關へ出ていて

「何にをいつて参りました」

と小さな聲でいう。

「いゝ奴よ。あれで坊主になつて來やがつたり、指を詰めでもして氣障な眞似で來やがつたら一ひねりしてやるどころだが、そんな事もせず、ずばりと素直に出て來て詫びるところが氣に入つたよ。これで界限も靜かになり、いゝ事だ」

「さようでございますねえ。安心いたしました」

「山之宿で、おれが田舎ッペえらしい用心棒の侍達を斬拂つてやったのに、あ奴ら餘つ程肝をつぶした様子だ。間合まあいがとんとうまく行つて見事に斬れたからねえ。人を斬らずに心を斬る、こう心掛けて居りますといつか男谷の精一郎がいったが、あの時は何にを云つてやがると思つたけど、本當だねえ。精一郎は偉い奴よ。劍術もあ奴が出て面目を一新するね」

傳次郎達が、後を追つて來て、それから少しの間、往來に立っていたが、やがて歸つて行く様子であつた。小吉はにこつとした。

次の朝早く松五郎が來た。

「不淨が聞えるなどと叱られねえようにお坊ちやまのお出かけをちやんと見定めて参りましたよ」と笑う。

「ゆうべ傳次郎が行つたのか」

「参りました。どうしても勝様にお前達同様お目をかけて可愛がつていたゞきたい、お前から頼んでく

れろと申しました」

「馬鹿をいうな。お前同様な奴らに、朝となく夜となく出入をされて堪るか。それではおれがお信や麟太郎の前で年中ちっちゃくなつてはならない。が、あ奴もいい奴だなあ」

「江戸っ子にもこんな野郎が居るのかと見るからに蟲唾の走る氣障な野郎でござんしたが、がらりと人が變りましたね。わたしもびっくり致しやした。人間なんて一晩とも云われないものでござんすねえ」

「そうだと、善人も悪黨も紙一枚よ」

「全くです。あんな組頭なら、緑町の火事の消口なんざあ、黙ってこつちが手をひいてもいゝんです」

「そうしてやれ。消口なんざあどつちがとつたつて火事さい消えれあそれでいゝものだ」

松五郎が歸つた後で、お信は

「今のあなたは、山之宿のお女郎屋などで、お刀を抜いて喧嘩をなさるようなお方とは見えませんでしたよ」

と笑つた。小吉は頭をかい

「お前はそういうがね、お前はあんな嫌やな人間の顔というを見た事がねえから、そんな事をいうのだ。

人間にはな、何んの恨みもつらみもないに、ちらつと見ただけで腹の底までむか／＼とこみ上げて来るような嫌やな奴がいるものだ。後になって考げえと、どうしてあの時に、あんなに腹を立てて無法をしたのかと思う事があるが、佐野槌で二階から投げ落してやつた錢座役人などは本當にこの類たぐひよ。あの往來でぶつ倒れていた姿なんぞ、今、思い出して、おれはまだ腹が立つて来る」

庭へ向つて、如何にもむか／＼するといふような顔つきでべっぺつと唾を吐いた。

「よくあるなあ、あゝいう奴は」

「それはあなたの我儘なお心ではござりますまいか。廣いこの世の中にはいろ／＼なお顔のお人がござり

ましよう。もう、そういうものにはお構いなさらぬがお宜しゅうございます。先日麟太郎もあなたと同じような事を申しました」

「何、麟太郎が。な、な、何んといったえ」

「瀧川先生の多羅尾様の御門番の顔がどうも氣に喰わぬ、いつか喧嘩をしてやると」

「えッ？ ほ、ほ、ほんとうか、それは」

「よく／＼叱っては置きましたが、困った事でござります。これから世の中へ出て行く者が、今からあのよう人にわけへだてをつけて見るはよろしくないかと思ひます」

「そ、そ、そうとも、そ奴はほんとにいけねえ」

と小吉は眉を寄せ、考え込んで終った。

「そればかりでは御座いませぬ。いつも瀧川先生へ威張り散らす殿様の多羅尾七郎三郎様は赤禿だが、一度、思い切りあれをぶって見たいものだなどと申しました」

「こ、こ、困った奴だ。こら、お信、子が教えはお前が勤めだ、しっかりしなくてはいけねえ」

「はい。わたくしも一生懸命、氣はつけますが、あなたも、顔つきが氣に喰わないからなどと、御勝手を仰せになり、二階から人様を投げ落すなどという事はお止めなされて下さいまし」

「わ、わ、わかったよ、わかったよ。が、麟太郎はよく／＼叱って置け」

「はい」

小吉は出しぬけに庭へ下りて行つた。てれ臭そうな顔をして、一度、お信の方をふり返つた。

切戸から岡野の屋敷へ入って行く。岡野の庭はひどい荒れ方だが、何んといつても廣いし、草木も多い。居なくなつた江雪の好みでいろ／＼な薄を植えてあるが、糸すすぎがよく延びて、これが風にそよ／＼とゆれる。元々先々代の拵えた屋敷で、石の配置もいゝ。

用人部屋で、平川右金吾が、机へ肘をついて片手に團扇をもったまゝうつら／＼と居ねむりをしている。机にも膝の横にも、いろ／＼な帳面が置いてあって、途中の紙を折疊んだのもあり、開いて伏せてあるのもあり、大袈裟にいうと、一寸、帳面に埋もれているという感じた。小吉は立ったまゝで

「おい、右金吾。まだ女郎の夢でも見てるのか」

「はっ」

右金吾がびっくりして眼をさました。暫くまじ／＼と小吉を見て

「いや、どうにも斯うにも、こんな亂脈はありませんな」

「そうよ。逢對の時の差替の刀もねえという貧乏だ。帳面がすっかりしてる譯はあるまい」

「それにしてもひどすぎる。この帳面を調べるとどうしても五千兩の金がある筈だが」

「べら棒奴、それあ借金だ。お前、金の勘定も出来ねえか」

右金吾はにや／＼笑って

「先生、これでもわたしは元は酒問屋の伴だ。劍術に凝って家業をしないものだから、おやじが武家の株を買ってくれて態よく追拂われましてね、先ずはこんな事になったが、帳合の事はよくわかるんですよ」

「そうか。お前酒屋の伴か。先代は酒亂、江雪と今の殿様が女道楽の競べっこをしている中にこんな有様だ。帳合なんぞ無駄な事だ。もう止せ。それにしても岡野にはいゝ用人が出来た」

「冗談ではありませんよ。わたしはこんな事をしているよりも、喧嘩でもして遊んで歩いている方が餘っ程楽しい」

「馬鹿奴、喧嘩なんぞどうするんだ。あ奴を一度やる度^{たぐひ}にがくん／＼と人間が馬鹿になる。お前、そんな事をぬかすと、おれがところのお信に叱られるぞ」

小吉はにや／＼して